志保之里　二編　二

イ曾5
508
17

○
程子云ク周茂叔今ム尋ネ顔子仲尼ノ楽ム處何事ヲ云
夫孔顔の楽ミ固ヨリ世俗の物に着して私有の若キに
非ずと但し学者聖賢の楽ミを道と楽むに在りと
とすれば猶道を足し聖者と道と二物となり豈
孔顔の楽しミと云ふべきんや夫レ聖賢ノ心
地洒々私意浄尽シ天意昭融して自ら
一毫の繋累なし只我々の遊楽とみ
てこそと見るべきや嗚呼世人這裏都て
黒窣々猫子狗兒の如し飢ては只食と求め
困ては必睡を思ふ一たび富貴をもとめ得ば
声色の娯を極め四体の奉を窮む一旦貧賤に

遇へども憂戚邪むこゝろなし　されども其
愚かなる許に叛て憂も亦其憂べき許なり
身能聖賢の地位と見得して彼不改の楽
意と謂れつきなり

○花鏡六に亀は愈老ぬれば愈小なり八百年に至ても
及て大さ銭の如し千年にして毛を生ずといふ云
秘傳花鏡は清康熙中の作草木のみを専一に
記せしといへども天文以下大かた此雑書の体也
今我國山川に小さき亀銭のごときものなし是は卵
より出てひさしからざる八百老亀の希なるものならんや
さいつころや廊下の土庭に雀の卵ぞろうり

○いご二つならぬとき主取得て床上に置し
が一ッあるの内に二つなりわれていと小さき亀をひ
からしたくめづらしきおもへれども会稽見て移ひし
されども亀はめでたきものなれども放て生と遂させ
すべしとて前津かたじけ池に放てりこと取りかけ
幾ほどなりしと引を親しく見給ひしかば
後いくほども音も囁き駅されしく退き其ノ
子も不幸のありしかれども家内常に是なり
事なそたはきもすなりや

○鶴は千年にして墓松に安じ亀は千歳にして荷葉
に遊ぶ故にめでたく祝事に亀連と並なんずし

こゝとの舞となり我国の人蓮花と佛具として佛を
いはひのまれ時ハ忌とされこそとしられ鶴亀
の形を造られ燭臺も佛前に置て人目をふれ給ふ
祝事につかふを厭ひ給ふや彼を忌ど是も
忌あん愚妄の煩ひ又呵呵
愚人死の名をたに諱懼ふるいとおそろしく
死して時は必冥途の死をとなるべく
て影して足口復の欲をおそれて
しらぬともしれ給ふ故なり汝愚にして汝妄

○鼫鼠の進退を云ひ前へと後くを疑ふ人を云ふ首鼠
なりといふよづきの鳥呼
両端とは物事の性疑て後ハかけては下がりびすこ
下がりびすぐ穴を出るは必見て所へ出し故に両端
を持たれ者をといふ足ぶ人のすがれを君子乃
戦々兢々として戒慎恐懼するとの混ず

○小藝ある者ことを衒ひて利禄を貪り只其名を
人の知らぬ事とおそれ故自ら衒ひ自媒して
ふんまと吹れて匂し賤しむ啻嘆嬌娘云々
とつこし雑貨を賣る商人手中に小鼓
を鳴らしてくを鬻ひ其鼓を嘆嬌娘と云ふ
雑貨纂要

○銭と料足或ハ用脚と云ふ俗これをおあしといふ晋書に

魯褒銭神論と著し無翼而飛無足而走と云ひ
しより起りて白玉蟾集雲遊の歌に初到家山に
辞骨肉腰下有銭三百足といひて一文と一定とす
べきにしも

○或人の家にて四季の歌二首づゝよみけるに

名所月

夜ら清秋をなさし此里あれてかりぬ霜に月ぞかれがく

山家の冬

さゝもきえなりけれ時らえび高ちたく里の窓づま

○或人曰往生講などいへる講の名義如何念仏講など呼ハ
構の字や書べき構ハ合也結也集也など字書にもありて
予曰不爾古へより朝廷の最勝講山門の三十講等本意ハ
経を講ずるためなれバ寛弘御記雲圖抄などに皆言葉に記せし
講ハ名にかけて訓じて凡其事にあらずと云ふ集合の義にハ
あらず

○世に墨を好む奇を衒者多し近き比京に藤井某
圍平と呼父ハ蘭斎とて手かき者なりしが文学もありて人
篤實の儒士なりし
おも称せられしされど古好事の色ものにて我国往古
の人名をとりて豊葦原苅丸と自称せし其友何
がしも同じさま名付つゝこそ青海原浮丸とぞ
云りけ苅丸死たると浮丸弔ひて其石碑に書つけし
嗚呼男翁の銘比重石にしも成らで果ぬることぞかなし

かしこき御も亦ありけれにこそ
○過し癸巳の冬前座主一品准后の宮日光御附弟の為に
円満院三井寺の貫首と請ひまいらせ給ふ十二月十一日
阿部正喬朝臣豊後守と上使として御心に任せられ
ける由仰せありし昔より山門寺門ひろまりかつて戦
かさねしもありけるに今日山寺よりこれを園城寺の
長吏延暦寺の座主の御附弟しかも給ふ事なれば
みな御こゝろやすく慈覚智證門じ玉泉の正流をとこ
しなへの法燈をかゝげましますいで法の為へたてまつす
絶こと山門三井各別みずに成れこれも高祖大師の冥慮
にかなひ給ひなん今なりて山寺むつましくともに一乗の
宗風もさかへなんと見え侍る

○和或人賦梅柳二絶

春嶺月残湖鏡闌　阿誰粧點寿陽梅
緑窓眼霽柳風嫩　笑向紫霞鸚鵡盃

○太和入道見佛　藤原親盛　世と遁れて後水辺述懐と云心を
すみける哥　新勅撰
かゝりける世に蓍とこひ出て波とむすぶ山の井の水
或書に建久三年法皇崩御の際出家すと云ふ吉
水の大師に帰して二心なく念仏者なりけり

○三井の道顕僧都古人の身を隠しけることを慕ひてしるし
ありとて世を渡る道にわかれこそ湖の方り

小舟のいとなみしも手爰心集にあつめたりけるなきせの中にんをもとめず往来の人を送り迎へておのづから月日を過ぐすハ漂ひなるさしにや作ん集るなる渡守描て一詞をつらねしかバ

長江載月雪艇
一棹暮霞水紋
窄
迎軽風送飯雲

嗚呼世人間々の知に迷ひ詹々の詁をかまびすしくて塵れ身を自若しむるて愚なれこそ此舟のあしの浪にれいハ消のくてて浮世にそまりもぞつる

○我尾府下正月初三の後市井なる心竹ハ三毬杖の遺意なりと申前にあるし例ハ信州松本の人云ク彼ノ城下正月なる所もこれに等し町々辻の中央にこれをよく長さ十餘間計の大柱（毎年一度調ヘ置て出シ用ゆ）と心をし松竹等をかざれるを此御柱と呼又幸神と称す（諏訪社三月中ノ酉の祭日御柱とて立つ所あり同風これに准ぜるにや）かくひ旦ツ童輩の中一人を別當と名づけ水あびせて柱下これを饗すさるいりと云て桜なりれ三毬杖と辻祭の幸神と混ぜし風俗なりや又語らく初秋七夕町々縄を以て家々の軒なるけ路をよこぎりてこれを張そこに糸をかけて人形といへるものをつくりて作りて紙衣とうきせ

いとをかし彼ノ縄にかゝりし夏城下皆同じことなれども
如何なる故にや國々節序の風俗いとめづらしき事多し
○初春望夜異邦には古へより家々門戸に燈を張出て
遊ぶ事なりしとかや我肥州長崎港も亦此ノ
風俗ありしときこゆ京はいまだ見ず他の國々
此ノ夜寂々たり凡そ今宵ハ一歳十二度圓月の始
なればハ人々もてはやすべきを餘寒おほしとてげしき
時なればみる人もなく梅が香も匂はぬ霞に
さしくもる光影心なき人なればハえたえがたく宋
の王夫人東坡ガ妻也此陰堂にて春夜の月を玩し詩にも
春月ノ色勝如秋月ノ色一ツ侯鯖録さるハ我國の
人も春夜の月を詠せし歌多けれど此上元にしもかぎら
ずや　朝廷の踏歌ぞこの比もめでたく行はるなれ
○我萱堂康存の時　霞ずハ春しるまじ夜ハの月
と口ずさびませしを今ハ昔となりにし春年々往て
復回り人世々去て不來いとゞこひしく悲しれ澄のぼる
月にこそ中々なぐさめられ侍りける
新宵懐旧上元月　床下涙朧一椀燈
春去春回故園裡　柳風嫋々為誰言
月やあらぬとかはりし愁喜両夢の中の夢なりし
我身ひとりぞ霜鬢むかしのまゝならず
うきにまさるれはなれ夢の中の夢にいかで心なぐさめん

○兼好法師がつれづれ草の中に家内子孫の
多きを兼しと心得ぬ人も有りなむこれ我身の事にて
なし。むかしより数ならぬ者にも子といふものありて
いかなる臣下大臣といへどもありてこのおもはずの
なれどもしかしながら子なければ心を会得せず
しかれば世人の願ひ寿命福禄は更なり家内
子孫の繁栄とこそあれどもしかしながら
さればひとの苦しみひがごと唯此子孫多きぞ身の
難とも有りて後世をれ有りなむや男子多ければ
あるいは修して又かれが世の名をやぶりとて
又かこち額をおほしもおやとなりて自ら貧且賤しくなりと
かなしいかなはうきとしても彼が身を立てかんとす
とば親の心なけれが有るにもされば士は禄位をもとめ農は田
園を増し工商は利の多からん事を思ふにつけて女子は
年もやうやくとしたけゆけばよろしき縁をもとめ
めて嫁せしめんと心のかぎりをつくしてやぞひきて出して又親
族とくらしともにいたはり縁定まりて其は調度なにくれ
ちらして製し身の程に嫁して後もなほ何かにつけて
苦の門ひろく愁の数を重ぬるなりすなわち毎に
子孫の多ければ己が身の生前恒々として安らか
なり心なければ道をもとめて行を正すことも出来ずまし
て子孫の為に嬰れ苦しみ痴愛に罪を造り

ひたすら世に富をひくにこびて只ハ幸を徼め惆悵して
禍を避けんとする而已出塵の眼よりこれを見バ豈是なからんや
○人の墓所を営ことからし棺割おろそかに窆築はなしたり
しにや其ハ臭気数歩の間に満て中々にくさかりしと
つらつら思へハ人と我と生を同しくす死生一体の不浄
豈異ハなからんや一息つかずして捨られなん後ハ
膀脹爛壊するに至りしかバ我とも亦世人のごとくさるな
へにくさはりなんされバ何ゆへにこれ究竟不浄の穢し
身なりけると獨り彼が為に鼻を掩ひゆくべきやと思ひ
入りけりしかバ浮世の所愛耽荒の妄念も今は忘じ
うすくなりゆくし心地ぞせしかれバ又臭穢猶我為
にハ善知識なりけることあはれにて有りけりし嗚呼
生前親子の愛敬より兄弟相交し給ふ際ハさびしく
其ハ家を離るゝたも不忍愛着の衾の裏戀慕の情
なれにけれハかゝるあしたの露とさへ根ゆかりのを死後
まちまちうしまれ心つき給ふ亦半日其家をり
停ぞしていそぎ遠く捨て行つまなさを死屍なども
なく腐敗して臭穢の狼藉なるが為せこれを思へバ
たまたま慙愧の心あるべき何ぞ愛執して厭離の念を
おこさざらんや
○殯塟ハ送終の大事孝子順孫心を尽し誠を致べきと我国
薄俗先道なくして塋域を撰バず治葬甚疎なり但し

かるに風水の説に泥み年久しく柩を停遊昔として
土に皈さゞるは本意を失すること多しとて丘氏の大学衍
義補これを辨ずる事詳せられど俗尚改りもせざりしや
今情に至りても猶停柩の事止まず康熙辛亥（我寛文十一年）
の仲冬停柩曾墳の人家火災し棺十餘具を焼厥し
骨辨じて其子孫痛苦伸る事なかりしと斉家
宝要（附論）に見へたり其他（天竺二寺）及び雷院金沙（護往等）
洪水の時棺屋数百所漂去せしよし記して
水火側らざるよし速に葬埋して保全すべき事なり
記く置

○癸巳の冬恵心先徳の御作なる地藏尊を圖らずも
得たりし又市に海水精の白玉其中虚なるあり
しとれるを買とりて何となくこれに入まいら
せてみるよりさきて今作といひてきらんやかに其御長も
かなひしぞ希有なることなれば考妣先亡の資福なれと
彼おぼさち成菩提心の如意宝珠にてうるはしく蓮座光
焔を彫し添まいらす（瑞峯比丘これと作ル）甲午睦月九日成就
せし因縁のめでたいかなしかるをハ此尊ハ阿弥陀
會の聖衆にして二佛中間の闇を導きまします
大慈大悲具足善悉の薩埵にてましますからたの
もしやて花香を供じ礼念しまゐらせ結びつけ給ひ
六の道辺の街の闇をとられなむの玉とこそ光りに

○或人問ふ頓德院の建暦二年壬申正月二十五日圓光東漸
大師洛東知恩教院にして遷化ありしかバやがて廟堂を
営し忌月を迎へ在出参堂して師恩を報ぜし
代々の天子亦叡信殘らず綸命を下し其忌月を
修せしめ給ふ殊に後柏原院鳳詔を製し此會の
法則を定め賜てより專ら知恩院の御忌と称す
勅に宣修法然上人之御忌云々 御忌の称呼ハ詔命
なり故に餘山のとバ知恩講と云なり
其正月十九日より廿五日に至るハ何の時より修せしぞ
答曰大師入滅の後五年にあたりて建保四年丙子
正月十九日より廿五日に至り一七日勢觀上人行ぜられし
東山西福寺に安置する所大師念持の本尊立像三尺の
背後の銘書に曰
建保三乙亥秋當寺に住す同四年丙子正月十九日より二十五日に
迄於當院に別時念佛執行す 沙門勢觀源智件の如し
此寺ハ古へ法勝寺の境内にして即ち其院なり勢觀
上人ここに住し大師手來の本尊を遺属ありて
此寺に安置しありて今現に在り
○年ごとに知恩報恩の為に一七日の間真影を供養し
まつりけるが押御忌のはじめ香を捻しまいらせて
花頂恩風遍　蓮門慈爾新
香光薰四海　五百有三春

○作物ツクモ 江浦草 倭名抄ツクモ
つくも所々ハ作物也ともしも髪ハ江浦草也言同じしてもの
異なりき也し
○長良兼良或人カ子ヨミと呼びけるとそれともよし後成恩寺殿のなりしも名ひりかしや三千條實枝ハサ子エと讀べき
なりとぞ
○普廣院の將軍義教初め青蓮院の上臺にてましまししり
時南禪寺の景南戀慕してひつひまりしせられしとや
○都離子ハ明儒劉基著述なり
郁離子文哉と云郁の字離ハ明にむ云義文明の意
なり

○近江国甲賀の金勝寺に寛平中の太政官府あり菅家
の奉りて自書給ひし其位署の下に菅原道真し
かりとぞ菅家の御諱とハ申さし書いかめ故實也
○豊臣秀次五山の僧として百十番の謎の註をなさしめ
られし建仁寺の雄長老總裁して慈照院に衆僧ら
聚故事を記すして記せしめし遊子伯陽か月と愛せし
等のまりけることの書に見れや小野頼風公卿補任に
かしこ舟を公にとりてむ書し類何もなくすとなん
其ころ足利より上巳し僧にえ結し云者大佛の辺に住す曰詩
趾所風椙舟と栢ニス、ムト讀すり舟ハ盪也て雜毛破意と
云書になりとて言上す諸僧其本と見れて云に秘して

不出秀次急に出すへきよし作せられしかば唐本に舟ハ義也と云二字
細字に書入しとなり是日本人の筆なりとて人々笑ひしかば
元信面目なくして遁竄せしとぞ刑或僧にきヽニス、ムとしよ
事を問しに出書なく書て見せし似し是も元信が類なりや
知るべからず
○周易をしに云ク眨ハヒユヤクと讀也 梅村載筆
語とひしにハアルフミニ云クと呼故實なり其他の書ハ其題
目と唱也
○林氏卜部家にいふ神籬の傳と平野より妄作の偽物なり
といひしと書し其ハ終りに曰我国昔より神を勧請する
時一ツの箱に赤土を入てこれを内陣に納められ幣と
奉拝して此物ハ木にもあらず金にもあらず神御座すとて
唱へたる秘事なりと云 今按るに神社全一の箱とても
封じたる法則も傳へこそ作りしが往古かゝる事なりしとも
不覚且伊勢熱田等の殿内に昔曾て有りしかばなし不
審し諸社の御正印を蔵て神輿にのせたる類中古
以来なるにやそれを神籬の御正印といふ ひもろぎ後世神社なりといへば 朝家より納てたまふ
太神宮印 熱田社印と四字を鋳し
給ひし此箱と印の御箱と呼 御正体の事にハ侍らざる
なり林氏の書ける赤土と箱に盛るの古風秋なき故
實なり
○瓢より駒を出す繪なり是ハ卯月近銀にて張果老蹈破故

廬といふ又張果紙を以て驢馬とせし事太平廣記に見えたり
にかくと取合て好事の者描しなるべし

○孔老仏吸酢の圖何人が描けるかしらん寿椿庵賛せしハ近比の
圖ならず東海瓊華に記せり

○鷲座新書に雪中芭蕉繁茂せしまゝなり非常の事歟

○佛者右膝着地ハ胡跪といふに樂記武坐致右憲左とあれバ
三代よりも亦此礼ありしを亮闇の潜北集に見えたり

○大日といふ僧入宋して佛照徳光禅師に参じて
歸朝せしはこれ悪七兵衛景清が伯父也景清平家滅て
後大日が庵に来る大日侍者と呼て景清になれたる色
なり酒を買来れと侍者即走て門を出景清我が
源家に訴て捕へんとするなるべしとて太刀を援て太日を切
殺せしといふ

此事出書何にかありや猶尋ぬべし

○大燈國師出家の後五条河原に乞食行として久しく
人にも知られずしておはしけれども門徒等いろいろ
ここ迄と語らざりしに一休是ハ我が祖の面目なりとて
風飡露宿無人犯第五橋辺二十年
と彼像上に書れしとなん

○人を捕へて勾引して賣し者猿ぐつわといふものをすれバ
昔ありしものと合せしと近比も出羽国南郷等にハ盗賊
ありて人を欺きさるぐつわを含せしとかや

○鵠　白鳥ナリ　一名天鵝　蠻國織出ス天鵝絨（ビロウド）ハ鵠の毛羽にて製せし今ハ太槃絲（イト）也

○搼來唇　搼ハ木の皮也　木ともゝて其皮をむきもの如く包んでおき　にはらごにて不能ニたゝぬ
口のそろはぬ義　或ハ口ごもると云　又ハをとがいともいふ

○朝鮮平安城より一里ばかり外に靈狐と云處あり河辺
岩石多き中に二丈ばかりの大石の面に高麗王　看日本ノ太也と
彫刻せり　其ノ字大さ二尺ばかりなりて皆く切入たり
戸川肥後ノ守　彼ノ地にて親しく見たりと云　林氏ノ説也

○碁基ノ傳ハ前の道具の日記也

梡脫丘　そこのぬけたるごきと　脱は帋と云　梡梲と同じ　梡脫校郎　用にたゝぬものと云　校郎ハかゝるをいふ也

○騃等　注　頼のいづつに年　たりなりと云
嗚呼小人斶才を擧用ゆれバ梡脫丘の用ゆる者と多く官
に入ときハ梡脫校郎といふべき蛇を室に養ひ騃を
して間を守らしむ　類倭漢多し　騃年太日也
愚漢亦少しとせず

○水中ノ塩味色裏膠青　傅大士心王銘ニ　水に塩をいるれバ見えざれども
なめて味を知る　彩具に膠を和して膠色見えざる如く
春の雨つれづれ　或人梅村載集一冊とを作りしなどに
抄して其二三を記し　且己が筆を添て遺忘に
備へ作り　作物以下ホ一ヶ条也

○細川頼之足利家執事康暦元年の夏一首の詩を作て阿波國に隠居す其詩云

人生五十愧無功　花木春過夏已中
満室蒼蠅掃不尽　去尋禅榻臥清風

右南方紀傳に記せり夫頼之義詮卿の遺命を奉じ幼君義満を輔佐すれバ天下を以て己が任とし中外をして奢りを禁じ約を用ひ佞を退け正を進め才を擇で毎に幼君の左右に侍せしめ従容にこれを匡導し老を敬ひ諫を納るゝの媒とせし又或時ハ軍を督して攻伐し数城を援て敵を退く（慶安三年河州合戦楠正儀等の勇士とくぞ出てん）ざりしかバさりしかども幕下年やゝ長じ驕泰の機に増し佞奸近習し政事始めに似ずなりし諫て猶納られざりしにや四七の文字に懐を述て速に薙髪せし鳴呼文武の才ありて世に重ぜられしも此後世の庸才豈補養の道を知んや鳴呼

○幽岩律師初ハ松高きと儒士なりし（味岡氏寛永の比の人也）故ありて出家す世をのがれしころ陸奥に下りて旅屋の床に古郷を夢みてめざめてそのかなしき何事に思ひわびつゝ余習はなされざりけれバとそこなひてあり

すつる身ハこころもとめぬ里と見し夢の枕もふるさとの空

奥の大沢なりける所にて薙染し首に蒼みをとられしかバ口吟ける

術業誤身三十年　忽披法服脱塵縁
平生甚愛文書癖　換得山林一味禅
世といひてきこえたりける紀行と云ふ墨蹟の紙
のりしは彼筆なり松嶋の記なりし後洛東南禅寺
の内に移り又泉涌寺に一院を営してすみつけく住せ
しが當時近如身の巨擘なりし
○張英子が万國掌菓圖（天竺及び朝鮮等の圖也）日本宝永庚寅の春
印行せし凡そ一百餘部の書を考へ證してこれと圖
せし圖の圖の所しれりし謬へれ歟
○二月上午（正徳甲午）予母の服なれバ　先師ともなしまいら
せずうらく長閑き空もまづくれ梅花と瑞香など
を聞きていとゞ春めれ侍りしかバ一詞と吟じて
友にとゞまり侍る
祖述憲章千載道　棠華豈陽化風新
江村春静舟車至　何處無花二月旬
○年ごとに熱田宮祈年新嘗の御祭の日直會の木具と
調して御廚に進め奉り久しき年の祈年の日
尾張氏の方へまかりし
祈るぞよ神のめぐみの天の村雨と云ふすぐも
こよしいふとして調進し侍りしてかひつげ侍り
あれてハ神もみそれの梅の花あるかなる春の色と
いふたの数珠ハ密家の故實もいやして或眞言師

に問しにこれハ修験者の罪ありてうせる故を
かし家角と書ていしたくと讀と答へし
○ひゑの山の如法経ハ前唐院ノ大師始めたまひし後代々
たへず書写ありしに世の中みだりがハしかりし
ころより断絶してとしたゆるくもありし善光寺ノ
大勧進の聖三百人金を寄て過し癸巳の年より旧き
に復せるゆへし山僧とてもし
○此ハにおもくれし又のとしの春薄中の生ひいでたるを
みやりて
○與国山の遺教会にまいりゆりて
立ありて打はひおるそそれのこされぬ春の青てゝると
われてきて法の事はにちるのこる鶴乃林の夜すのてのまふ
○同じ年かの庭の桜さりあへぬゆりし翌年見し
世乃まえとまとされじとして
まち風のもてむかふ袖にちるをれと帰よるむかふれあかけ
○或人曰寺院に旛かかるハ供養おせぬるに多ハ佛号又ハ
諸尊の種子を書て懸るなり都ハに能僧の物に所供の霧隷
等を書ぬれ謂すもて予曰これを密家に是れ灌
頂の時道場四隅の旛に三十七尊の種子を書き施餓鬼
の場に五仏の号書る旛と立旦利に普集餓鬼の
呪書る旛を掛て幽鬼として聚会せしむる等伝
習の故実なり一槩にいふべからずされバ仏菩薩に

供養する所の旛には其尊の名号或は種子を書て
懸るを誤りとすべからずこれを餘尊に互用せば
又罪あるべしよつて道場の内外および旛等には
決して名号種子あるべからずとしるす今世明僧多ゟ渡り来て新製のもの
掛る是も如法ならずゆるしくあるゆへ故に諸寺拔てこれをかりのものなり
○不動明王に四臂の像ありこれは鎮宅修法の時のもの
崇むるや又二臂にして持物の異なるあり傳て甚まれなりとすべし
○日蓮党が寺に安ずる愛染明王とみれば本手を合掌
に造る儀軌の説に背て彼等が本尊
とする叡山如法堂の安置と似せて己が家のもの
なりとのみなり

如法堂は慈覚大師初て建られたまひし後に恵心僧都
釈迦多宝四菩薩普賢弥勒観音文殊と造て安置したまひける
と叡岳要記山門記等に見えたり
其釈迦多宝の印相相傳の儀に背けり彼徒或は合掌に作り又は半蓮華とす
四菩薩も亦山門の故實に違ふまでて彼耶徒が妄作一二に
あらず
○地下はたとひ二位三位に叙すれども下襲表袴指貫有紋を
着せざる是本儀也但し近世摂家清花等より召たる
稗領の儀にて有紋を用ゆ地下の二三位は社家に在て其咎かるべしといへども
其意これを著して堂上と等しかれんとまどひてせば驕
僭といふべきのみ又禁色を聴されざる四位五位の殿上人

或ハ緌白或ハ緇の紫の付色の指貫を着せらる武家ハ
中大将侍従といへども輙く紫のさしぬきを用ひず大臣
浅葱の緌白也況や諸大夫ハすべて平絹なれバのさしぬき
なるを今諸社の神人六位といへども橡の袍紫の指貫等
を着るなり但し其社の非衣と号して着る例なり
奥田の祝師家の如し　古例なくして私に用るハ忌憚れ甚しき
いふべし

近世吉田の卜部家私にゆるして橡を服せしむ嗚呼
僭上非礼なる哉

○或人屏風の繪に處々の名所を色紙形にかくとて我住
國なれバ鳴海潟とかくべきさる名所繪にかゝし例や
ありと尋られし　予曰後鳥羽院最勝四天王院ハ
建られし時院内の障子に國々の名所を書て廷官
に命じ和歌を詠じて奉らしむ其中鳴海なりて
歌をしためしなりしとくらしかりそめのす
とつなりくハ私に書とたしかなるべきなりや
新古今六冬部に最勝四天王院の障子になるみの浦書ける所
藤原秀能
風ふけバよそになるみのかた思ひ思はぬ波になく千鳥哉
同じ所　権大納言通光
浦人の日もゆふぐれになるみがた帰る袖より千鳥鳴なり

○真福寺ノ上人　宥天今東都の同福寺に轉移す　大栖の第三世仁瑜法親王　後村上帝ノ皇子

と東南院の宮と称す東南院在處何の地なりやと[illegible]曰高
野山の東南院ハ智泉法師の開基（天長二年五月十四日寂ス）也されハや
是より後に南都東大寺の東南院ハ古へ此院の寺務なれハ
門跡たり仁和親王も南都東南院の御門跡なり
し華厳宗の僧語りしハ童子にておはせしゆゑなりし其事
ゆゑに知らずハたゞそれ答へまいらせし事也

○五十年前我国印本の書紙ひろく厚りして楮紙濃
に薄りし三十年以来ハ紙漸くうすく楮紙甚だうすく
し厚製せる是書の紙なれバ多く手すべき為也近年ハ
紙跡なしく薄く作る故なる紙にて（山城の伏見にて出す類）書紙
下の切合の所そろり厚く見ゆる中ハうすくてひす

しりえ
各紙の丁数も書の半バにして或ハ九三之六三十ノ三十五
などあらし終丁みて紙数多く有るを見るもいや
し楮紙のうすきハ前より表あがれどもしれや
紙と多用ゆまじき為なれバ疎薄の製なり
絹帛の類も花やかに包て其織初ニ尺ばかりの所ばかり色
地あらし其奥ハ次第にあしく織出す漆塗乃
黒等もおもてのミよく見えて内しろうすされハ今世
人の心を是を以て知るも一ッ軽薄にして外をのミ好ミ
人を欺き己れ利を得事を欲して他を省ミざるよ
古今人皆等し季世の風俗いとかなしき事多かる

なりけんこれ志と發さゞらんや

○近世諸家の貴人京より妾を召さるゝに多くハ日蓮宗也
其故ハ日蓮宗の僧等其檀那に心をあはせ下賤の數なら
ぬ者にてもかほよく生れ出し處女あれバ金銀をあたへて
養ひたてしめ艶藝をならハせ年漸さかり行けれバ日蓮宗の
法義を教へ伺ひこれハかり太家の妾となり幸せられバ必ず
主家と勸て我か宗を其國にひろめさせたくこそ也邪徒
が奸曲ここに至れりとく京がくしし（太家妾と云時ハ志き金子をて多つりハす口入の者ありて乱行なぎ婬妾を通じて）
これと彼奸僧等にありて故に貴く進でハ佛制に違きぬし
一時にうかもゆるし
絶く退てハ貴人と欺て邪法にいのしむ其罪誅るも容
ざりし嗚呼國賊云々

○僧松誉 摂列大善寺 日蓮邪徒が所編せし斫邪顯正論の
破文と書せり 正徳三年癸巳三月 其中一二と抜す
邪徒安土宗論ハ俗書に出て必ずしも辭とすべしに
松誉因果居士が當時自筆せし安土問答記を以て證
せり前人未發歟

此書越後國礒辺郡高田勝願寺の藏に在り元禄七年
洛東松原妙順寺あして開勸せしといふ云

邪徒云弥陀ハ五十三佛の終也自在王佛の弟子也弥陀ハこれより
前の事ハしらじ五十三佛の始に錠光佛あり何ぞ過去の諸佛
弥陀に依て正覚すといふべきや等と松誉破に智印三味
經一巻 全一云 念燃燈佛 錠光佛ト云 之前過八十億劫有佛名月

悳乃至有轉輪王號曰恵起王 恵起王ハ阿弥陀佛是也

云云弥陀發心ハ燃燈の前に在リ云 常演十劫實ハ久遠

弥陀也等ト辯ぜり

日蓮黨ガ佛書に闇く且事理の説を知らざるよりかく妄評なして

いふべし

邪徒文殊願生の文其出所を不知して邪許となす 松誉 文殊

發願經 全一巻晋佛陀跋陀羅所訳 四紙 入蔵の函を出ズ

願我命終時滅除諸障礙面見阿弥陀佛往生安樂

刹生彼佛國已成満諸大願阿弥陀如来現前授

我記 云云

信景曰彼日徒ハ只誑惑なして学と知らず古今皆日蓮ガ

穢液を啜て酔るが如し其言高慢無曲のいやしさは

歯牙を労さするに足らざるのみ

邪徒が顕正論に青こ目の出所を知らずして合類節用集

及倭尒雅などいふさもしき俗流の書を引けり 松誉も

らとかへて大笑せしけるも彼宗の坊主等が文こ目

なる今に始めぬ事ならねどこれらまで無下なる

こそ不便の次第也

○上巳の日

疏光三月二落花ノ風　笑酔桃紅ニ白首翁

林下蝶身春睡夢　自草蓬戸世縁空

○或楽人の庵にて春霄乃月とんかりしがあるじの僧

かゝる夜の月もあはれなりと云ふにぞ墨染の袖
ともまくらしほどにかうまたおもひやりて
しめり我身もまたかゝる夜の月にあらぬ世の春の首

○弥生の初つ夜善篤寺の北の路にて男女刃に伏しゐるを
人多集りて見てかゝりし　嘲りのことばかりけり
近き世乃俗京も鄙もかゝる不義の死を尽くせず
去し年の冬云小林の辺にて男女自殺し
卯月の初にや紀多郡にして何寺の前にし縊
女手と同しく死しゆく文月の末六八日尾頭にて
も男女互に死せしよりて道ならぬ事といふとも
ましきのみど世くいつもの色乃惑ひを絶ゆる気
のる前にも時として又かゝる恥かしさや

白刃紅血路頭死　見嘲聞憎幾回恥
世上誰呼無色迷　百歩走五十歩止

○宇那井松

墓上に植し松とて五株松とて五株ありし故實
なりとや我國旧きたてしおもむき古塚の松のむかし
ありそ有之

○烽火ハとぶひと訓せり大和国にありて歌多し但し

首須磨と淡路とに廻ふ船には飛火を立行し
夫と見て互に船からせしとさしの烟と呼て
倭歌よも又よめり和州のとぶひにはあらず
○吉水大師云念仏を修せん所を貴賎と論ぜんに
海人の漁捕までも皆こ通し所々造詣すべし
甚しんを　　炬範上人
阿弥陀たのむ声すらあさましや音や我をむ為かむ
名称しとくまし行しまし所も同じこゝろにて
親ぞめし懸のやぞれこそで月は終て逢生の宿
○東照軒光明大師の画像を送りまさる御生
十四香を供じまいらするとて

千歳花新桃李場　柳塘重緑幾流芳
玉座如意杖頭月　赫々徳光尽十方
○侍従信庸朝臣京師所司代去年陸奥東下の時縁
ぜらせし和歌　院御所御感ありけるとて來るを
くちおしと思しし五首
逢坂
知るも知らぬ人も行くて帰るを今ぞ逢坂の関
鏡山
今まで見し首を今のかゞみにうつしけり世の姿をぞ見ん
小夜中山
東路にて別れて来りしを今もまた越ゆる小夜の中山

海士

月花のうらみをさそひもあらねはみなかのま

田子の浦にて海士の汲ぬとこそ

世を渡る業(ワザ)いろいろある中に汲海士も汲ぬ者も

○横渠先生曰ク仕者入リ治朝ニ則徳日ニ進ミ入リ乱朝ニ則徳日ニ退クト云

徳ある者すら治乱に化せらる況や无徳の身進むも心ありて義を知らざるや嗚呼世人主君に信ぜられん事を求るに急ならざるは無し或ハ進信に心あらバ汲々として其守を失ふあらずハ必ず悔ゆそして義を侮(ヤブ)らんと程子かく戒られし

程伊川曰ク欲スル貴カランコトヲ之心ト与行フ道ヲ之心ト交ゝ戦フ于中ニ豈ニ安ンジ履(フミ)ミ其ノ素ヲ乎ヤ

道を行ふにつある者といえども貴からん事を欲すれバ必ズ義に勝ツ事不能ハ況や世人貧賤に安ぜずして其ノ進ムに貪躁せんとおもひ幸イに進ムことを得バ驕リ溢るゝざる所なからん故に賢者ハ其ノ素ヲ安じ履ム其ノ處ヲも必ス楽ム其ノ進ムも必ス為スことあり易ニ曰ク素履往(ユク)无キ咎メとハ此ノ謂イ也

寒キ士之妻弱キ國之臣各ゝ安ンジ其ノ正ニ而已ノミ為タ擇エラミテ勢ヲ而従フ則チ悪(アリ)之大ナル者不レ容レ於世ニ矣

これ厳に人の志を誡め安正の二字ハ外(ホカ)にたゞに他

其邪正なるかざれバ必邪故に勢に従ひと大悪し
せる鳴呼世人所権に媚阿て利録を求る者と
大悪と思ふる人とも知ず却てこれとぬしし
或ハうしやうて其する所に效者多しこれ亦
悪徒といふべきものそ
○或寺の庭なる藤さかりなるころまで俟ちて
紫の雲みなくとあるがねに咲える花の色しられき
○婚姻のすぢ定まりし後に一洞なりし人ありけれバ
あな婚の心がそくも絶れてしまひなげけりけるたらん
○不料穿堤能漂一邑寸煙泄突致灰子室　劉子
げに其事ハ微に起りて其末ふせぐべからざるに至れる者

すべてかれ多し就中色の惑のこそ老若知愚ともし
ふるまよひの闇くらく財を捨名をくだし身を
喪す類倭漢古今更幾万人ぞや此春甲午柳営の女房
梨園の優人と私行のすりありけれ甚淫婦男なり彼
親族まで多く刑せられし他に海こまでしく東なり
拝なくれうとて絶てておさしましきかぎりなり
女房なぞの流罪又ありけれに付にやこれ甚初
微を慎まずして恐に心を放ちゆる禍しなり絶
きすとて文のとくに
身おもふに初めるれ石もみだれりてたち多すするぎの沖は　波
○甲午三月十七日より十九日まで朝暮日の色血のごとく

光耀なりし月も赤銅鏡のごとく赤く見えけれ或記
のけしき蝕に似たれハ人怪しと街に語りけるす
前にもありやと人々かり申日ときハ記録などにても
あらんや覚へかゝらず慶長十九年甲寅の春朝日如赤銅に
神君の御手譜にしるされ給ひしか
此父ハ難波の役ごさぶりし其他地震などの変も侍りし
近くハ寛文二年壬寅三月数日の朝月色紅のごとく見え
なりしとや
此年五月大地震六月洪水翌月の災ありし慶長十九
年より寛文二年まで四十九年寛文壬寅より
今年に至て五十二年歟

年にかゝるあれども給ハず烟霞の気と合て立ちしめ
給はるバころも春ハ見なれ日月見ゆべきこと五十年
をうにして墨色のへ給はかいろさる天変の論すと云
給りてよ古ハからはるごけやけく御祈給りしか今ハ
さるよきこく給りぶかりやとよひ給りし日月九二十日
より十七日の限但六九日百と除る 熱田の御社にて御祷祠
つかまつるべくして女房の奉書にて内蔵権頭仲頼 御使中川三吾平太
に仰せて給りし日は丹職と致し卯月三日
御撫物及び大麻と朝庭へ捧まいらせける上弦
のとより日月光を増し空乃けしきいと静れ
なんなり給ひ 諸社にても御祷なりしときこゆ

同月寅て奉書をかゝされて御祷ゆるし
四月十四日 御使仙石内蔵丞

○愛田の菩薩号と大福田と称す 大福田大菩薩の号は供僧家の称呼也
是厚田 頌倭名に叶て此称を同じきは大論に大福従良田生といふ意なるべし凡福田の言仏経に多し

○維摩経と無垢称経と同本異訳也

○世界 遷流を世と云 方位を界と云

○娑婆は胡語これを堪忍と翻せり 釈迦方誌に云 此土の人強識念力能忍苦楽堪任道器故名堪忍と云 宝積悲華等の釈尤も広し今略之

○僧衣を衲衣といふ 按するに仏祖統記 註南岳伝 衲衣哉

しかし せう衲の字は俗其義を失してこゝろく

○歌書に大原三寂といへるは何ぞや曰枇杷贈相国長良八世冬嗣公一男五代従四位下為忠は歌人也其二男皇太后宮大進為業法名寂念世紀の作者也其第壹岐守朝業法名寂然往生伝に入れり其第長門守為隆法名寂超此兄弟三人ともに有智の歌人なりし当時これを称して大原の三寂と呼し也

○中世の俗語婦女と女性と呼し近来小童を小性といふも此類なり又大家の息女を御料人と称す東山乃公方義政の御料人局の如し

○常徳院將軍家義尚の女三時知恩院の住しなれり入江殿と称す
万松院將軍家義晴の女も亦此後住なりし其師ハ宝鏡寺の
理源尼なり今日の如きハ入江殿宝鏡寺殿皆皇女の尼公
住持したまふ

○人身の十神ハ
丹元神心神 幽由神耳神 照霊神目神 大和神口神
玉龍神鼻神 含明神肝神 皓華神肺神 常在神脾神
魂停神膽神 育嬰神腎神 なり
見余氏事物異名上ニ
外に耳目口鼻なり内に肝肺脾膽腎なり是ハ
統ステりハ心也故心を主宰とも霊府とも称す心ハ性情を

合したる名動静感應皆一心の主宰也心正しければ
百躰倶に正しく心不正にして何とかなすべき人よ
くしてくれずや作らん

○大毘盧遮那成佛神變加持經 大日經也
金剛頂一切如来真實摂大乗現證大教王經
蘇悉地羯羅經
金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇經
大毘盧遮那佛説要略念誦經
右真言ノ五部ノ秘經とし云

○玄義 文句 止觀 法華の三部天台の説也
これ三大部也
金光明經ノ玄義 同經ノ文句 別行ノ玄義 同キ文句

観音經 觀無量壽經ノ疏 妙宗抄と云

これ天台の五小部と云章安の記なり

○佛法像教 刻木爲佛以形像ノ教フ人ニせ

余氏が事物異名に見へたり是佛像を云ふ我国佛と
ホトケと訓ずるハ浮屠の音便又ハ佛陀の音轉と云り
但し按ずるにホトケハ佛教の二字の音便にや
フツとホトと音通ず佛教とハ佛法像教の中略歟
ケハ教の字の略音

○沙門桑門これ其轉語 比丘苾蒭も亦然り僧を蒙古
にハ出魯忽兒と呼てぞ僧に倭訓なかりし。歌書ニ
にりけばハ法師の略言せ尼をアマと呼を倭訓とし
あらざるハ非也阿摩ハ老女の梵語なり比丘尼の事に非ず

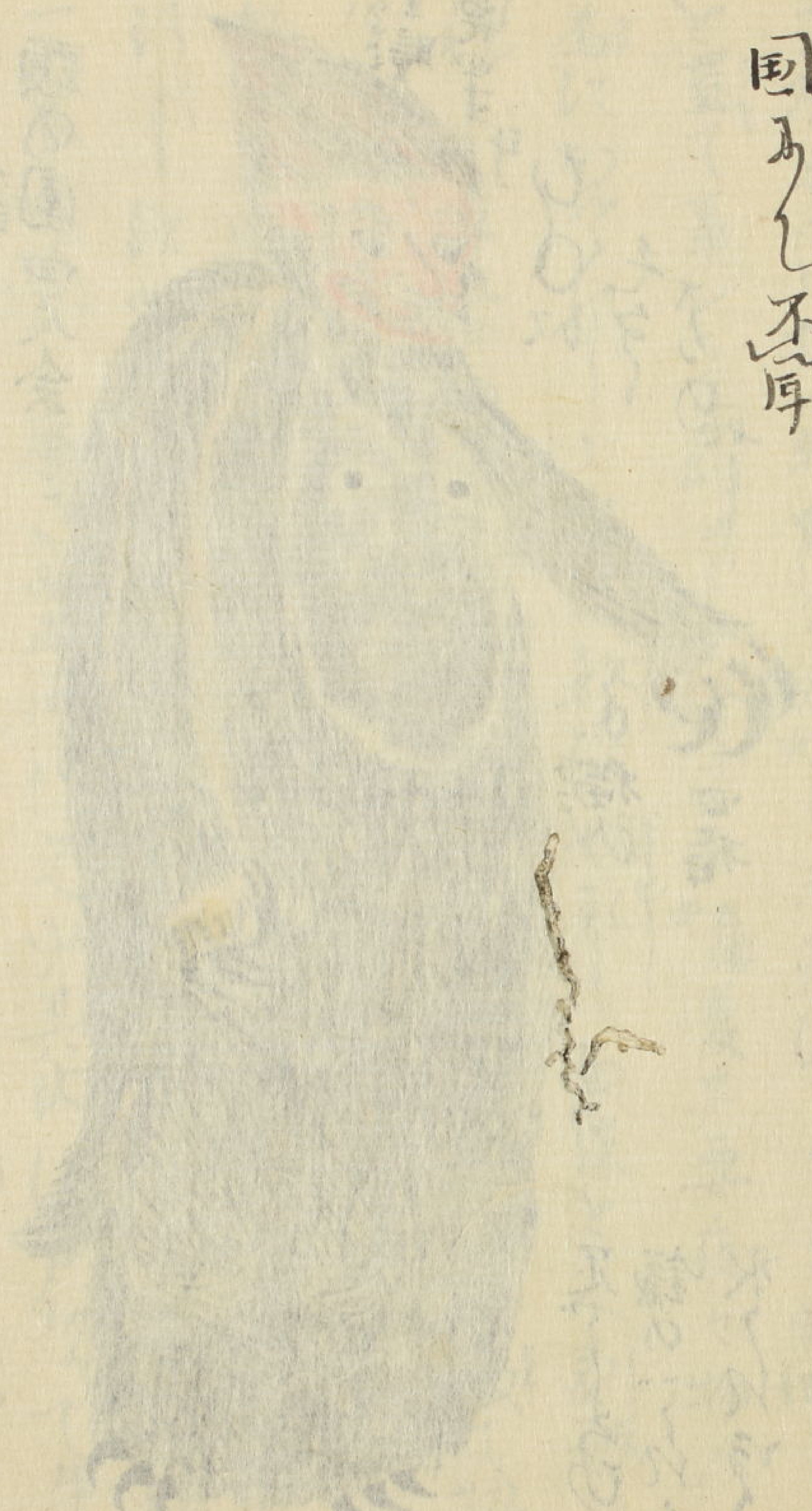
○修多羅 仁王經の二諦品ニ翻して法本とすこれ
佛の言教諸法の本なるが故と云て書物を本といへる
此等の意なるべし漢唐の人の言初しなる
なれども何の書に経書を以て本といふことある
見えざれず今佛書に此事あるを見て按して
傳に備ふ何のミ儒家の書に此事なくば後ノ人常ニ書キ
謬へたまふ

○枳椇とケンホノナシと讀るを按ずるにケンホノナシとハ常
にて云梨無實欤云圃ノ梨江南ノ橘と對したる故のこ

○馬の一歳なるを馵 音注と云二歳なるを駒と云三歳なるを
駣と云四歳なるを騑と云ふ

阿濕婆ハ馬の梵語なりきりこしにて馬を産する
所なり多し其中古ハ雲中後の大同府也に出るものを良馬とし
せし大抵西北方に産する者を勝りとし東南
方に産する者を劣弱とす我国にハ東北方に
産する者を良しとす梅するにりつこし西北の地ハ
寒に東南ハ暖なり我国東北の国寒多し
よつてれバ馬ハ寒国に生ずるがよろしくなり
○牡驢北馬に交て生ずる子を騾といふ牡馬の驢に交て
生ずるを駃騠音決題といふ牡驢牛に交て生ずるを馲
騊音陶といふ牡牛驢に交て生ずるを騙驥音謫蒙といふ
牡牛と馬と交りて生ずるを駏驉といふ是等の類我

国あらし不聞か



○正徳四年午四月四日所ゝ殺異獣

長七尺八寸余にてちくましに似て面人のごとし手足ハさるのごとく頭毛赤り身毛黄ハ帯ぶり

頭の圍四尺余

豆州豊川村ハ牧野家大学成央の釆邑にして吏渡辺傳守細
と置て事と主維せしむ今年正徳四夏其妻夜々物乃
為におそれしが或夜終に妖死し面皮とらく剥破ら
れし五三日ありて御有家に入と覚使郎カと援て切
りけれバよこてゐいしが飛走りて形とみえざれバ
血流て遠く行し跡あり家人等血とつけて行
行しに四里ばかり去て宗山村と云里の奥山に
一窟ありて廣さ四五間にて其内にて声ありて牛
のごとく吠けり吏に告しかバこれと啓し牧野家
より家人多く遣し鉄炮を以て彼窟をおしけれバ
異して走り出るを打ころして[illegible]

牧野家ノ家人

鈴木平八　石原征枝　小次傳兵　山本珎弥
早川ふ左　津村ふ兵　佐也志左
渡邊傳三　足軽五十人

かゝる者を毎にも其信り依て直に偽たりゝなゝぬ者ノ前ゝし気色し度ゝてを其形を圖し傳ふる中に又一様なるぬ形もかれば其こもしかゝぬあやしよ人僞されば深山幽谷の間ありて見もまれぬ異類多くありれさいそかゝ越後馬蒭取山ありて斯うこめ獣と排るゝし云し又信州松本の人語りりゝ八九四五年前水野家の家人某が家へ毎夜ありて来りかびやしりゝと或夜よくゝれを老人のでゝ長高く夏夜なりしが蚊幬にねとりて内とある亭主蚊幬を出てぬ出てふせし所にてきりしとめけてかゝり窓より飛出るを刀抜て切り付しかども打えて急せてさゝれし毛多く取置とまのかゝる見れなりしも今度の異なれもさし類よる其真偽いかゞあらんの見せし圖とてに写して後のあしさふす備へ侍る

○甲午六月八日東都雷霆甚しく諸侯大夫の家数ケ所へ落し　土屋相模守　阿部豊後守　南部越前守　松平淡路守　増山對馬守　村越頼母等の家其他猶多し
同じ七月朔日江勢尾の間迅雷大雹と降らし

江州水口以東坂但し東名以南ハ何れのさハなし
我郷田辺亦雹ふらず 仲の中江の浦あたりハ
ふりしと漢人いふ
其内尾北善師野に降し雹ハ大なる桃實ほど
ありし猶も大きなるもこれありと信せしもの多く
ありしかバ家損じ田稲抔そこなハれし故にて有司
に告げ又其際例の一目連通りしといひけれバ
城西込野の民家なとも損じ人死けるとなん
廣井八幡の社内榎樹なれ倒るる所も有りたるなり
又ハ屋根をまくりしもあり

府下雷落し所多けれども大なるハなし 暴気
通り行しのみや
橋町瓦師の家稲荷社内納律の田圃 其他
日蓮宗派の寺など五六ヶ所ハまさりに雷落
しとぞきこゆ
されも半日斗の内 朔日の前ハ雷 陰晴三度雹両度
ありしかバ国に杖つく翁もいまだ見ず
とぞいひつる
其夜亥の時又雷甚し
かるに又所々にて雨ふりしかれのみにて
止みしもあり雷声ハ本州の内きこえざる地も

いりしかん今日の苦楽愁喜も亦復如是欤或人の方へ申おくりし歌

定めなき夕ぐれ西乃空のみを中したゞよせてハさだまらずや
其二三日ハ俄に新涼いろ天爽に秋色も見分ず燈下書を見るにて便ありし
蕭ぬ指と秋のすがしくて夕べ涼しき風のおとづれ

○東都花子　辞世

金銀官禄復天地　業性輪廻報此身
得失有無本来法　貴賤凡聖一同如
苦哉両国長橋下　流去市川流水中

他日知音若相問　彼心明月主人公

乞笑庵隠居の書之